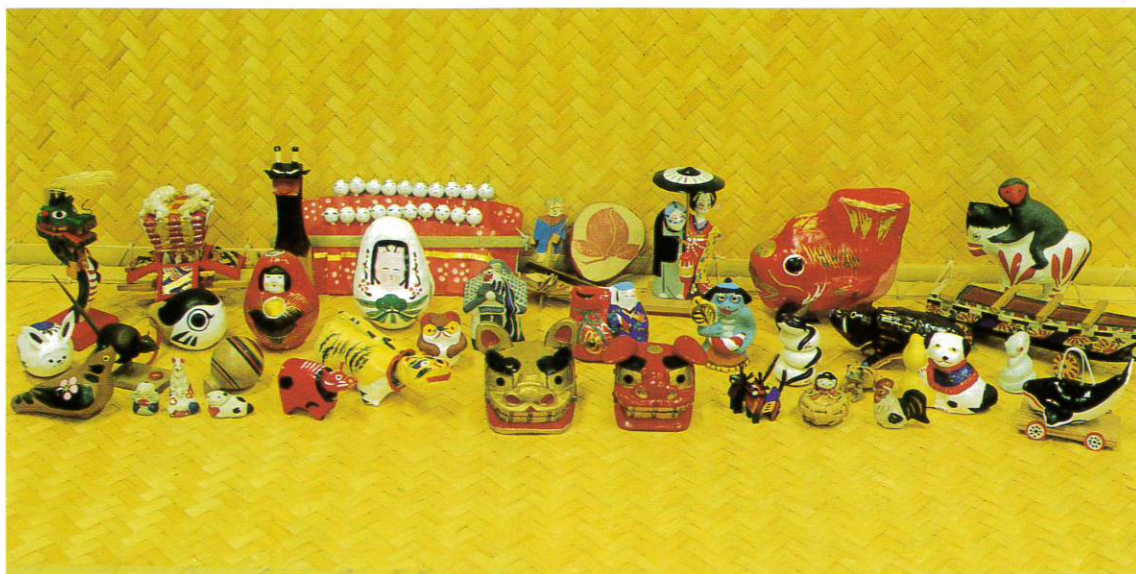


しいのき



郷土玩具のころろ

名誉館長 三 隅 治 雄

玩具は子どもの遊びの具とだけ見られがちですが、各地に伝わる郷土玩具をながめると、郷土に生き、郷土を育ててきた住民の心ばえと、その心をもってつくり上げてきた生活文化の歴史の精華を知る貴重な民俗文化財だと感じます。鳥取の流し雛などは代表的な例で、1年の身の穢れを人形に託して水に流す古代の習俗の形と心が玩具化されていまに残されたのです。香川の讃岐チョウサ、愛媛の宇和島の牛鬼は共に祭礼に曳き出される練り物のミニチュアで、前者は山車に太鼓をのせて打ち、後者は鬼頭牛体の巨大怪獣のつくり物を曳き出して群衆を驚嘆させるもので、悪魔除けの縁起物としても親しまれています。福島県会津若松市の赤ベコ、同県三春の三春駒なども人気の高い玩具ですが、前者は疫病除けや子育て、後者は馬の安産祈願のお守りにもされ、このように民衆のさまざまな生活の願いが玩具に込められているのです。また、藁製の飯の保温器をゆりかごにして子をあやす風俗を玩具化したいづめこ人形、長期出漁の漁師が子へのみやげにつくった鯨舟の玩具など、庶民の心のぬくもりの感じられるのも、嬉しいことです。

文化財よもやま話

大地に眠る歴史

小学校落成記念

野方村が野方町になった大正13年（1924）当時野方町には野方東尋常^{じんじょう}小学校、野方西尋常小学校、そして野方尋常高等小学校の3校がありました。それぞれ現在の江古田小、鷺宮小、野方小の前身です。各学校は長い歴史を背負い、より良い教育の実現のために時代に応じて自らの改革を行ってきたことでしょう。



学習環境を整えるための新築、増築も度々行われてきました。左に上げた資料は野方東尋常小学校落成記念品のおちょこです。この記念品の外側には「昭和四年一月野方町尋常東小学校新築」と、

そして内側底部には「落成記念」と記載されており、昭和3年から4年にかけての新築工事完成の際に、執り行われた落成式に関連する資料であることが分かります。新校舎建設は、校舎の老朽化や関東大震災後の戸数増加に伴う児童数の急増により始められ、校舎は現在の敷地にそれまでの平屋建てから木造二階建てへと姿を一新しました。

江古田小学校の歴史は江戸後期における東福寺の寺子屋^{てらこや}に遡ります。一時哲学堂^{せいがくどう}に学舎を移したこともありました。また校名も遷喬^{せんせう}小学校、野方東尋常小学校、江古田国民学校、江古田小学校と変えてきました。数度にわたる新築、改築に財政的な困難のあったことでしょう。小さなおちょこに学校を作り、守り、育ててきた地域住民の落成を祝う心持が込められているように思います。

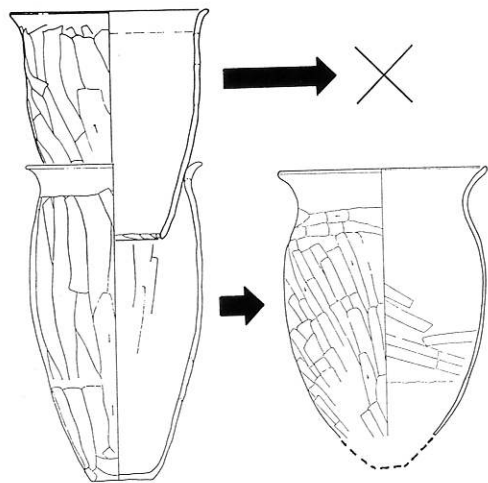


▲昭和4年の校舎（『開校百周年記念誌』より）
参考文献『江古田小学校開校百周年記念誌』

台所物語7（蒸すから煮るへ）

奈良時代の人々は、律令政府によって、細かく支配されました。一生懸命につくった米はそのほとんどが税になり、国府（今の都庁・県庁）や国分寺の建設作業へも行かなければならないのにかかわらず、その携帯食糧である乾飯をつくる米すら不足するようになりました。

万葉集の山上憶良の歌にも、農民は貧しく、台所のカマドにもクモの巣がはって、ろくに食べ物もない状態が描かれています。このようになると、人々は逃散（ちょうさん）とって、与えられた住居や田畑をすてて、逃げた人々も少なくありませんでした。



▲甑（こしき）の消滅と甕（かめ）の変化

そして、かつては米を蒸し、乾飯をつくるのに必要であった甑（こしき）は奈良時代の後半には無用の長物となり、消滅していきました。このため、ご飯の炊き方も、蒸す方法から煮る方法へと変化していったのです。

やがて、いままで湯を煮立てるために設置していた、縦に長い甕は、米を入れやすく、また煮やすくするため、短く丸みを帯びた形態に変化し、薄いつくりになっていきました。

しかし、このような一般庶民の生活とは裏腹に天皇や中央の貴族達は、それぞれ贅沢な生活をし、政争に明け暮れていましたので、地方の荒廃はさらに進んでいったのでした。

古文書つづり

江戸時代の飢饉対策

今年は冷害で、寛永の飢饉以来とも言われています。寛永の飢饉といえば、疫病などによる人も含め、飢饉による死者は数十万人に及ぶと言われています。今でこそ米が不足すれば輸入できますが、江戸時代では、米不足は生死に関わる社会問題になるわけです。

江戸時代の前期、飢饉に際しては、幕府が「お救い米」などと称し、民衆に対し穀物を分け与えていました。しかし、後期になるにつれ、幕府は指導する立場になり、実際にこうした穀物を蓄えるのは村役人の手に移っていきました。多摩地域でも特に天保の飢饉以降、米・麦・粟・稗を貯蔵する倉庫が各地に建てられました。

右の史料は、弘化元年（1844）に中野村の小前百姓が、稗を貯蔵した時に納めた量を書き記したものです。年貢納入分や種籾分を除けば、自身で



▲弘化二年貯稗詰立小前連印書上帳（堀江家文書）

食べる分のわずかしかないはずで、非常時に備えて、そのわずかしが残らない稗を切り詰めて村へ納めたのです。わずかな量でも小前が全員納めると、相当の量になりました。これを蓄えとして貯蔵するわけです。

上のような史料は、人の名前と稗の石高の記載のみで、一見すると面白くない史料ですが、私達に色々なことを教えてくれます。

「備えあれば憂いなし」です。

中野往來

続我等の中野

前号に昭和6年に中野町教育会が募集し一等に入選した「我等の中野」という唱歌をのせたところ、三番以下も是非知りたいとの問い合わせが数多くありました。そこで、その要望にこたえてのせることにしました。

昭和初期の中野を思い浮かべながら口ずさんでください。

- (3) 区劃整理も略に成りて
施設は日々あたに華まり
中央線を始めとし
西武電車や青バスや
諸車の交通織ることし
(共に愛せよ我等が中野)

- (4) 氷川神社に宝仙寺
桃園、園、塔の山
古き名所も数多く
生産品も日に増して
栄え行く町、我が中野
(共に誇れよ我等が中野)

- (5) 全町八つの小学校
学ぶ我等も諸共に
学びの道に励みつつ
母校に飾る優勝旗
共に中野の名を挙げむ
(中野、中野、我等が中野)
(中野区史資料から)

中野昔話

いたずら読み 高等下宿

「高等下宿」。今の学生街に下宿屋がありますね。それが、「高等下宿」って書いてあるんですね。それをまた、昔は右からこう字が書いてある。「高等下宿」って。左から読むと、「宿、下等にして高し」っていうんですね。そういう、なんていうか、いたずら読みってのはありましたね。【新井 男 大正5年生】

『続中野の昔話・伝説・世間話』より

事業報告

各種事業経過

1993年10月～12月

事業名	内 容	期 間
特別企画展	“絵”系統で見る区所蔵の絵画	10/1～10/14
企画展	「郷土玩具展—ふるさとをたずねて—」	10/14～10/23
ミニ展	「酉の市と熊手」	10/19～10/30
古文書講座	「入門コース」 講師 白井哲哉氏 (埼玉県教育局生涯学習部) 大友一雄氏 (国文学研究資料館・国立史料館)	10/25～10/13
史跡めぐり	「江古田コース」 講師角田茂氏 (前中野区立歴史民俗資料館主任研究員)	11/5
文化財調査	区内寺院文化財調査	7/28～
協力展	「太平洋戦争と中野区民の暮らし展」：平和の森公園内・資料室	7/3～10/28

寄贈資料一覧 1993年4月6日～8月12日 敬称略・受入順

資料名	点数	氏名
習字道具・裁縫箱他	5	兵藤 一成
そろばん	1	斉藤 みつ
さんすうせっと	1	佐々 昌樹
グルマストーブ	2	常葉町町長
運針布・踏み台・着物他	7	東風谷昌弘
弁当箱・色鉛筆	4	中村 弘子
防空用ランプ・納札他	多数	大西 路男
水車	1	大橋すみ代
キセル・たばこ巻き器	2	倉員 保海
8ミリビデオ	2	武山 正雄
電球・写真・貨幣他	多数	山崎 隆造
ペーゴマ	多数	岡崎 学
鉄かぶと・物指・農具他	多数	山崎 清司
陶製湯たんぽ他	多数	根津 力三
ご殿びな他	多数	若林 正巳
箱種・立札	2	宇野喜江子
杯	5	渡辺ゆきえ
物指・矢立・コンパス他	8	岡 惺治
下駄	1	塩島トミ子
カメラ道具	一式	宮崎 勝弘
銅壺	1	遠藤富久子
トランク	1	谷口 博三
高下駄	2	山田 惇
型紙・ビデオテープ他	4	吉次 義英
東京朝日新聞	1	福 蔵 院
掛軸・額他	多数	加藤 澄
古銭・古札・宝くじ他	多数	斎藤 安時

◎貴重な資料をありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

NEWS

※今年で5回目を迎える「おひなさま展」は2月5日から3月6日までです。

※3月の刊行案内

・改訂版「路傍の石仏をたずねて」

・新刊「中野区の史跡」

区内各所にある史跡の由来や解説を1冊の本にまとめました。これを読んでから出かけるか？見て来た後に読み返すか？…

史跡めぐりの際には、ぜひご利用下さい。

NEWS



▲社会科見学、農具の実演

入館状況

1993年9月～1993年11月 (延71日間)

一 般	社教団体	学校教育	合 計
8,238	445	653	9,336

発行年月日 1994年1月1日

山崎記念
編集・発行 **中野区立歴史民俗資料館**

〒165 東京都中野区江古田4-3-4

☎ 03(3319)9221 FAX 03(3319)9119

(印刷物登録番号 5中教社第13号)